

「めでたし」

佐藤 紀子 カナダ

海峡を渡る気概はなささうな紋白蝶が小刻みに舞ふ

「自力ではもう輝けないトシだわ」と娘が頬に紅を刷きをり

末の子の（老いの嘆き）を聞くまでに歳重ねたり 「めでたし」とする

「老いてなお美しく」といふ講演でアイシャドウを塗るコツを教はる

教はりし化粧せぬまま十日たつ 宿題をせぬ子供のやうに

威風堂々

加藤 慶子*埼玉

かまきりが鎌高々とかざしおり威風堂々みどりのさむらい

諍いののちの夕餉の面映ゆさ夫へ注ぎたるビール泡立つ

弟は杉苗植えて二十年ポツン、ポツンとふるさとは過疎

波にのる若者なべて黒装束御宿に棲む海鳥になり

睡眠の大切さなどオオタニが言えばすぐさま早めの就寝

コーヒー牛乳

中津川 勸坐 埼玉

湯あがり冷えたコーヒー牛乳をこくりと飲み 退院できた

たをやかに見ゆるイヌムギ実はワル前の草地を二年で占めぬ

てんでんに散歩にでかけ出くはせり四十三年暮らした妻と

郊外のわが街老いてうら悲しこの春よりは鶯鳴くも

晩年の不運はどちら惜しまれて逝つたあいつとまだ粘るおれ

雨の温度

齋藤美衣 神奈川

噴水は飛び上がりたしはつなつの宇宙の胸に触れ続けたり
子の背せなにてのひら当てて夕焼けの仕事をひとつ手伝つてゐる
ハンカチを広げてたたむ みづいろのあひだに夏のほひもたたむ
手の中の新潮文庫に降り続く雨の温度よ背を丸め読む
弾力も温度もなくせし父の手を撫でるのみなりただ撫でるのみ

かんむり座

佐藤玄 神奈川

街の夜の煤色の空に埋もるる星掘り起こすカメラの眼もて
写されて再生画面にかんむり座あらはる遠き記憶のさまに
モニターちの小さき星座はいにしへのギリシャの神の妻の宝冠
アルファ α 星ゲンマは「真珠」かんむりを飾れるパールホワイトの星
画像なる星座は光の抜け殻と知りつつ愛かなしまろきかんむり

むかしを覗く

中村敬子 東京

何もないやうですべてのあつた日は娘の位置に自分がゐる日
贈りたき花を選べぬひと日なり五月母の日六月父の日
晩年の父が描きたる油絵のどこか知らねど知つてゐる山
油絵のなかの小径のさきにある森に住まふか父と母とは
あぢさゐの花の数ほどある小窓ひとつ開きてむかしを覗く

峡谷の村

今村 日出子*長野

ことごとく支流の水をひき寄せて太々流る朝の天竜
草倒れ水位ここまであがったとくつきりわかる泥水の跡
交差する舟と電車を見んと待つ橋の上にて無縁の人と
朝七時午後四時なれば子どもらの声ひびきくる時報のように
空はたったひとつの出口 夕鴉追われて出づる峡谷の村

土降る

山田 宗夫 長野

さみどりの里芋の芽がつんと噴くちよつと澄ました少年のやうに
草原をカシミヤ山羊が食べ尽くしカシミヤを買ふ国に土降る
ランニング・マシンの飽けば万葉のあひぎこえ幾首うたひつつ走る
日々皿を洗へば妻のジーンズのリメーカーの青きエプロン貰ふ
入院のまぢかき妻がわがためのおむすび握り冷凍にする

みづの匂ひ

今井 由美子 岐阜

ひつそりとうすみづ色の季の来て今年も雨なり父の命日
雨のなか剪りし紫陽花かかへ来る少女はみづの匂ひに充ちて
あぢさゐの葉かげにひそと父顕ちぬ五十回忌を終へし雨の日
ゆつくりと水の夢から醒めゆかむ梅雨晴の午後を潤むあぢさゐ
濃く淡く青葉かさなる木々の間に見え隠れする六月の空

数独

小坂喜久代 兵庫

真つ白のポストを庭に立ててよりひとときは冴ゆるあぢさゐの青
亡き人の誕生日など覚えゐてバラ一輪を玄関に挿す
新しき線香の匂ひに気付きたり次女の帰りしあとの仏間に
おとなりのポストに夕刊入れられて長きひと日にゆふぐれが来る
鉛筆がよく減る日なり難易度の高き数独小半日練る

大出水

池下寿子 和歌山

甚雨大水村を襲ひて川沿ひの植田や畑が土砂に覆はる
全国ニュースにわが町の川がいくたびも映りぬ令和五年六月
大出水襲ひしのちの夜が明けて蒼天に取材ヘリが行き交ふ
台風のをさまりし朝の晴天を「上様日和」と呼びて仰ぎぬ
大水の引いて無事なるわが畑の潦にひとつアメンボ走る

梅雨の六月

中村仁彦 福岡

夕暮れの駅を出てくる現役の人に混じりてしばらく歩く
竹竿で打ち落としたる梅の実のあをきを拾ふ梅雨の晴れ間に
あさがほの苗を植ゑをり昨年は入院してゐた梅雨の六月
ヨガをする妻はなめらかに体曲げ股から覗く天の橋立
手術後の五年を過ぎて今日も行く首の痛みを癒すリハビリ